

スポーツOCBに対する一体感と チームスポーツ経験の影響について¹

The Effect of Unity of Sports Teams and Experiences of Team Sports on Organizational Citizenship Behavior for Sport

田原 麗衣・上田 泰

Rei TAHARA・Yutaka UEDA

【要旨】

本研究はスポーツ従事者が自分の属するチームに対して行う組織市民行動であるスポーツ組織市民行動に注目し、その先行要因としてスポーツ一体感とチームスポーツ経験の影響を分析した。167名の学生の回答者から集めたアンケート調査のデータを分析した結果、スポーツ一体感が高い場合やチームスポーツの経験がある場合のほうが、そうでない場合と比べてスポーツ組織市民行動がより行われやすくなる全般的な傾向があることが見出された。さらに詳細に分析結果を調べるとスポーツ市民行動の次元によって、スポーツ一体感の2つの次元のうちいずれが影響を与えるかが異なること、またチームスポーツ経験についても有意な影響を受ける場合とそうでない場合があることが分かった。

キーワード：スポーツ組織市民行動、スポーツ一体感、チームスポーツ経験

1. 序

組織で働く従業員には多かれ少なかれ、また明確であれ曖昧であれ、あらかじめ組織から職務遂行のために公式的に求められる行動範囲が存在する。しかし、どのような組織でも従業員に必要な行動をあらかじめすべて規定しておくことはできず、組織はその状況に応じた従業員の柔軟な対応に依存している。このような行動は非公式なものではあるが、組織の存続および機能に不可欠なものであり、この種の従業員行動をいかに促進させることができるかは、どの組織にとっても重要な課題となっている。

このような組織のために従業員が非公式に行う行動は組織市民行動 (organizational citizenship behavior: OCB) と呼ばれている (Organ, 1988; Organ, Podsakoff, & MacKenzie, 2006)。その行動は、組織のために、あるいは組織に勤める他の従業員や管理者のために行われる自発的な貢献行動である。OCBの概念が提唱されたのは1980年代のはじめであるが (Bateman & Organ, 1983; Smith, Organ, & Near, 1983)、その後40年以上にもわたり、

1 本稿は、田原がOCBSに対する一体感やチームスポーツの影響などを中心に基本構想を練り、上田が質問票の設計やデータ分析を行った。また、執筆については両者が共同で行った。

OCBの概念、尺度、個人的・組織的先行要因、個人的・組織的結果について数多くの研究が、様々な国の多くの研究者によって行われるようになってきている。今では、OCBという概念は標準的な組織行動論のテキストには必ず取り上げられて説明が加えられるものとなっている。

OCBは組織に対する従業員の貢献行動として概念化されたものであり、それは人が見も知らぬ通りすがりの人に親切にするとといった行動とは別のものと考えられている。実際、見も知らぬ人への親切では感情的な要因が強く影響するのに対して、同一組織の同僚への親切ではより認知的な要因が強く影響することも過去の研究では明らかにされている (Organ & Konovsky, 1989)。OCBは、組織から与えられた多様なベネフィットを認知する従業員が、それに対する一種の返礼として行う行動と考えられてきた。換言すれば、自分がかかわる組織に対する「好意的な態度」が、OCBを促進させる要因となってきたのである (Organ, 1988; Organ et al., 2006)。

しかし、人と組織の関係は「勤めること」を通じてのものだけでない。さらに、人は、勤めている組織に対してのみ、このような「好意的な態度」を抱くわけではない。一例として、顧客のブランド信仰のようなものがある。たとえば、宮澤 (2015) は、BMWの二輪車に惹きつけられる顧客からなるブランド・コミュニティに注目し、そのコミュニティが当該二輪車のプロモーションに果たす自発的な貢献行動に注目している。また、学生は、自分たちが学ぶ大学に勤めているわけではないが、明らかにその大学と関係を持っている。Ueda and Yoshimura (2011) は大学生が所属する大学に対する貢献行動を大学市民行動 (university citizenship behavior: UCB) と呼び、その行動への影響要因を明らかにする実証分析を行っている。

このように人と組織の関係をより広く考えることにより、OCBの概念は自分が様々な形で関わり合いを持つ組織に対する貢献行動として広義に定義づけることも可能になる。そして、この傾向の一端として、昨今はスポーツチームに対してそのチームに参加する者の貢献行動としてスポーツ組織市民行動 (organizational citizenship behavior for sport: OCBS) という概念が注目されるようになってきている。スポーツチームとそのメンバーの関係も、組織と従業員の関係とは異なるものであるが、メンバーは時に自分が所属するチームに対して満足やコミットメントを感じるものであるし、チームに対するメンバーの関わりを広く考えることでOCBの概念を適用できると考えられるものである。昨今、このOCBSに対してもその測定尺度や他の変数との関係について研究が進められるようになってきている。本研究は、このOCBSに注目し、特にOCBSに対してスポーツ一体感が与える影響について実証的に明らかにするものである。また、スポーツ一体感の向上に関係すると考えられるチームスポーツ経験とOCBSへの影響を同時に分析する。

2. OCBSとその尺度について

OCBSはAoyagi, Cox, and McGuire (2008) や持田・高見・島本 (2016) によって概念

化されたものである。この領域で先駆的なAoyagi et al. (2018)では、OCBSの次元として援助行動、市民道徳、スポーツマンシップの3次元が開発され、それはスポーツ版OCB尺度と呼ばれている。その後、持田ら(2016)では、スポーツチームにおけるOCBを「チームの構成員が自らの意思で、自発的に行う行動で、その行動によってチームの活性化を促進させるが、チーム構成員がOCBを行ったからといって、試合のメンバー選考等の部活動場面に影響するわけではなく、行わなかったからといって非難されることがないもの」(p.17)と定義してOCBSの測定尺度の確立を試みている。彼らの研究では最終的には以下の5因子(5次元)が抽出され、それぞれが4つの項目で測定される尺度が提唱されている。

犠牲行動

効果的コミュニケーション

対人支援

誠実さ

清掃行動

持田ら(2016)の記述によると、犠牲行動とは自分が試合に出ない時にも試合に出る選手を支援するという行動である。次に、効果的コミュニケーションとは間違っていると思うことをはっきりと相手に伝えるというものである。効果的コミュニケーションという言葉からは良好な意思疎通を図るというニュアンスを感じやすいかもしれないが、むしろ内容的には従来のOCBであればvoiceの次元に近いと考えられる。対人支援は、悩みを抱えた仲間積極的にコミュニケーションをとるということで、従来のOCBでのaltruismやhelpingの次元に近いと思われる。誠実さとは、チームやチームメイトに対する不満をこぼさないということである。OCBには誠実性と訳されるconscientiousnessという次元があるが、これは組織の規則をしっかりと守るという行動であり、その次元よりは、組織に対して不満を述べないというsportsmanshipの次元に近い。最後の清掃行動とは、グラウンドやベンチなどを汚さず、ゴミは片付けるという行動である(Organ et al., 2006)。

続いて、持田・高見・島本(2021)では、選手のライフスキルが集団凝集性や集団効力感に与える影響関係において、このスポーツOCBが媒介作用を果たすかどうかを明らかにしている。当該研究においてライフスキルは明確に定義されていないが、一般的にはライフスキルとは「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な心理社会的能力」として定義されるものである(嘉瀬・坂内・大石, 2016, p.546)。彼らの行った共分散構造分析によれば、ライフスキルからOCBS(一次元に集約)へのパスは0.88と0.1%水準で有意な正の影響、OCBSから集団凝集性と集団効力感へのパスはそれぞれ0.61と0.55と1.0%水準で有意な正の影響がある一方で、ライフスキルから集団凝集性と集団効力感への直接的な影響は認められなかった(すなわち、部分的な媒介ではなく、完全に媒介していた)ことを明らかにしている。

従来のOCBの研究では、OCBに影響を及ぼす先行要因 (antecedents) の解明に研究の中心が置かれており、その伝統に沿って考えればOCBSに影響を及ぼす要因の1つとしてライフスキルの影響を明らかにした点では、彼らの研究は非常に有益である。しかし、ライフスキルはOCBSに影響を及ぼす要因のひとつに過ぎない。他の有力な先行要因の候補として、本研究ではスポーツ一体感を取り上げてその影響を解明することを目的としている。

3. スポーツ一体感とその影響について

Yamada, Arai, Nakazawa, Kawata, Kamimura, and Horosawa (2013) は、集団凝集性の一次元としてのスポーツチームの一体感 (unity of sports teams) に焦点を当てて、その測定尺度を確立しようとした研究である。そこでは、最終的には集団凝集性の総合的な尺度を構築することを目標に、その集団凝集性をチームワーク (teamwork)、一体感 (unity)、および魅力性 (attractiveness) の点から考えて、まずはそのうち一体感の尺度を構築することを目的としていた。ここでスポーツ一体感とは、「チームが1つに統一されていると (メンバーが) 感じること」 (p.491) と定義されるものである。

彼らの分析の結果、最終的に抽出されたスポーツ一体感の尺度は各4項目からなる2次元のものであり、それぞれ集団統合感 (integration for the group) と集団コミットメント (commitment) と名付けられている (なお、この次元の和訳は本論文の著者によって便宜上付けられたもので、原著者によるものではない)。ここで集団統合感とは、集団メンバーの統一性やその絆の強さを示すものであり、集団コミットメントは集団に対するメンバーの帰属意識やその強さにかかわるものであるとされる。

過去のOCB研究では集団凝集性はOCBに正の影響を与えていることが実証されている (Organ et al. 2006)。また、集団統合感はやや独自の概念であるが、集団コミットメントが組織コミットメントに類する要因であると考えられるのであれば、この組織コミットメントもまたOCBに正の影響を与える要因であることが広く知られている (Organ et al. 2006)。したがって、スポーツ一体感を構成する集団統合感や集団コミットメントもまたOCBSに対して正の影響を与えることが十分に予想できる。

4. チームスポーツの経験がOCBSに与える影響

スポーツには、対人種目や個人種目の別はあるが「対戦相手と競う」という特性があることから、勝利のためには個の技術や体力を高めることや戦術を豊かにすることが求められる。加えて、チームスポーツにおいても個の能力が大切なことに変わりはないが、いかに連携してチームとしての戦術を体現するかがチームパフォーマンスおよび勝敗に大きな影響を及ぼす。個人スポーツでも多くの場合チームに所属して一緒に練習したり団体戦を行ったりするため、チームの一員としての行動を求められる場面は多いが、チームとしてプレイ中に様々な行動選択をしなければならないことはチームスポーツの競技

特性といえる。Carron, Colman, Wheeler, and Stevens (2002) はスポーツ集団を対象とした研究において、集団凝集性とチームパフォーマンスには正の関連性が存在することを報告している。

続いて、河津・杉山・中須 (2012) は、OCBSがチームの取り組む課題や目標・戦術、チームや個々の特性に関することをチーム内でどの程度共有できているかを示すチームメンタルモデルに影響を及ぼし、さらに、チームメンタルモデルがチームパフォーマンスを予測するという関係を明らかにしている。また、OCBSはチームメンタルモデルを介して間接的に大会結果を予測していた。特に、チームへのコミットメント行動がチームメンタルモデルに影響を及ぼしており、チームの戦術や課題などに対するチームメンタルモデルの変数が大会結果を予測していた。これらの結果から、大会でよい成績を収めるチームは、特にミーティングに積極的に参加することや、改善点をメンバー間で積極的に話し合うといったチームに対するコミットメント行動をより行うことができ、それがチームの成功のために必要なチームの戦術や課題に対する共通理解を高めていることが示唆された。

これらのことから、チームスポーツ経験者はチームスポーツにおけるOCBSの重要性を経験的により強く認識している可能性があると考えられるが、それに関連した研究は十分に行われていない。

5. 分析仮説

以上の検討から、OCBSに対しては、スポーツ一体感を構成する集団統合感や集団コミットメントはOCBSに対して正の影響があると考えられる。また、OCBSに対しては、さらにチームスポーツ経験が正の影響を与えると考えられる。具体的には、次の仮説を提示できる。

H1：集団統合感はOCBSに正の影響を与える。

H2：集団コミットメントはOCBSに正の影響を与える。

H3：チームスポーツの経験はOCBSに正の影響を与える。

以下では、この仮説を実証的に明らかにすることを目指すこととする。

6. 分析方法

6-1. 標本について

本実証研究に使われたデータは、首都圏の私立大学に在学する学生に質問票のあるWeb上のURLを提示するか、用紙を使ったアンケート質問票を配布して集められたものである。インターネットの場合と紙の質問票では、前者の場合には回答によって答えるべき次の質問が自動的に選択されるが、後者の場合にはそれを回答者自身が選ぶという濾過質問の部分を除いて全く同一のものが使われている。学生には紙とインターネットのいずれでも回答できるが、重複して回答しないように注意を与えている。このよう

なアンケート回収方法は、ランダムサンプリングの観点からは必ずしも理想的とはいえないものの、本研究の目的が、他の研究に先駆けてOCBSの先行要因を識別するパイロットスタディ的な役割を果たすものと考えれば許容される方法であると考えられる。回答者数は176名であったが、単一回答を求める質問に複数回答をしている者など、分析に含められないものを除いた最終的な回答者数は167名(男性85名、女性77名、不明5名)であった。

6-2. 変数

本研究では以下のような変数が設定された。

スポーツOCB尺度。スポーツOCBについては、持田ら(2016)の5次元20項目をそのまま用いており、それぞれの項目に対して「まったく重要ではない」から「極めて重要である」までの7点尺度で回答を求めている。持田ら(2016)では、次元ごとに4つの項目が仮定され、その内的信頼性も高かったが、本研究でもクロンバック α の値は0.7以上という一般的な基準を満たしている。

スポーツチーム一体感尺度。Yamada et al. (2013)が設計したスポーツチーム一体感尺度8項目を用いている。ただし、Yamada et al. (2013)の尺度は、オリジナルは英語であるので著者たちのほうで日本語に翻訳している。また、同研究では“*Our team members feel united.*”のように特定のチームに回答者が所属することを前提とした文になっているが、学生によってはスポーツチームに所属した経験がない者や過去に所属していたが現在は所属していない者がおり、そのような学生も回答ができるように「野球やサッカーのような団体競技で試合に臨む場合に、以下の項目にどの程度に同意しますか。「全くそう思わない」から「大いにそう思う」まででお答えください」との文言を冒頭につけ、各項目については「チームのメンバーは強い一体感を持つべきである」というように、「～べきである」と回答者の価値判断を問う内容の項目に変更している。このような変更により、本研究での尺度は、回答者が所属するチームとの一体感の尺度ではなく、チームとの一体感に対する回答者の必要性や重要性の認知に関する尺度となっている。この点は、分析結果の解釈においても注意すべき重要な点である。

Yamada et al. (2013)のスポーツ一体感尺度は、8項目は4項目ずつ集団統合感と集団コミットメントの2次元に分けられており、本研究でも彼らと同様に2次元で考えることとした。いずれもクロンバック α は0.7を超えている。

チームスポーツ経験。本研究では、チームスポーツに従事した経験がOCBSに正に作用する可能性があると考えており、この点に関して、「あなたが過去ないし現在に経験したスポーツ競技種目についてもっとも代表的なもの、得意だったものを下のリストから選んでください」という質問を行った。選択肢には、①スポーツの経験はない、②野球、③サッカー、④バレーボール、⑤バスケットボール、⑥テニス、⑦陸上、⑧競泳、⑨ラグビー、⑩その他(具体的に：)が置かれていた。選択肢の中には、たとえばテニス

のように、ひとりで競技をする場合と複数で競技する場合があるものが含まれているが、本研究では明らかに複数で競技をするものとして、②③④⑤⑨をチームスポーツと解釈した。また、⑩を記した場合には、具体的に競技種目を記入することになっているが、具体的に記入された競技種目のうち、フラダンス、ソフトボール、ハンドボール、フットサルをチームスポーツと考えた。こちらはチームスポーツの経験がない者を1、チームスポーツの経験がある者を2として変数化している。

性別。本研究では男性1、女性2として性別を変数化している。過去のOCB研究では性別は統制変数とすることがほとんどであり、本研究でも性別を重回帰分析の説明変数の1つに加えることとしている。

6-3. 分析方法

本研究の分析はすべてSPSSを利用した。変数の基本統計量および変数間の相関係数を分析してから、性別、集団統合感、集団コミットメント、チームスポーツ経験の4つを説明変数として、各OCBS次元を被説明変数とした重回帰分析を行った。なお、説明変数のVIFの値はすべて3程度以下であり、多重共線性の可能性がそれほど高くないことから、特にステップワイズで変数を選ぶのではなく、通常重回帰分析を採用している。

7. 分析結果

表1 平均・標準偏差・相関係数

変数	平均	標準偏差	1	2	3	4
1. 性別	1.475	0.501	-			
2. 集団統合感	6.154	0.937	-0.03	(0.912)		
3. 集団コミットメント	6.103	0.954	-0.061	0.834**	(0.866)	
4. チームスポーツ経験	1.472	0.501	-0.260**	0.128	0.150	-
5. 犠牲行動	6.130	0.832	0.110	0.410**	0.516**	0.201**
6. 効果的コミュニケーション	5.813	0.850	-0.075	0.252**	0.325**	0.209**
7. 対人支援	5.960	0.880	0.184*	0.427**	0.472**	0.066
8. 誠実さ	4.768	1.250	0.059	0.264**	0.299**	-0.082
9. 清掃行動	6.179	0.856	0.015	0.434**	0.425**	0.269**

N = 161-167, **: p < 0.01, *: p < 0.05

変数	5	6	7	8	9
1. 性別					
2. 集団統合感					
3. 集団コミットメント					
4. チームスポーツ経験					
5. 犠牲行動	(0.924)				
6. 効果的コミュニケーション	0.464**	(0.856)			
7. 対人支援	0.558**	0.456**	(0.883)		
8. 誠実さ	0.296**	0.069	0.331**	(0.851)	
9. 清掃行動	0.533**	0.401**	0.442**	0.290**	(0.869)

表1は今回の研究の説明変数および被説明変数の基本統計量および相関係数を示したものである。表の括弧の中の数値はクロンバック α の値であり、いずれも基準である0.7を超えている。まず、性別の影響は、男性のほうが女性よりもチームスポーツにかかわる場合が多く ($\gamma = -0.260, p < 0.01$)、女性のほうが男性よりも対人支援をより多く行っているという傾向があることがうかがわれる ($\gamma = 0.184, p < 0.05$)。集団統合感と集団コミットメントの間は予想通りに高い正の相関関係があるが ($\gamma = 0.834, p < 0.01$)、興味深いのはこれらの一体感の変数は、チームスポーツ経験とは有意な関係がないという点である ($\gamma = 0.128, n.s., \gamma = 0.150, n.s.$)。すなわち、本研究では集団統合感や集団コミットメントに対する志向を尋ねているが、これらの志向はチームとしてスポーツを行った経験とは関係ない。チームスポーツをやっていたからといって一体感が培われるわけでもないし、一体感に対する志向が高い回答者が、チームスポーツをやる傾向が強いというわけでもないという興味深い結果が得られている。

OCBSの次元間の多くは有意な正の相関関係が見られる。唯一の例外は、効果的コミュニケーションと誠実さの関係である ($\gamma = 0.069, n.s.$)。効果的コミュニケーションの次元は、正しいと思う事を積極的に発言することにかかわるものであるのに対して、誠実さの多くは他者に不満を言わないことに関するものであり、ともにチームのために行う行動ではあるが、とらえ方によっては反対の行動のようでもある点が、両者の相関関係を薄いものにしたとも考えられる。なお、持田ら(2021)の分析では、両者の関係は $\gamma = 0.22$ であり、この値は1%の水準で有意であった。彼らの研究においてOCBSの次元の相関係数間に有意差があるかどうかは不明であるものの、他の相関係数に比べるとやや関係が薄いようにも見られるので、効果的コミュニケーションと誠実さの間の相関関係が薄いものになるのは一般的な傾向と言えるのかもしれない。

OCBSの次元と、一体感やチームスポーツ経験の変数の関係については、その多くが正の相関関係を持っており、これは我々の仮説に沿った結果であると考えられる。有意な関係にないのは、チームスポーツ経験と対人支援および誠実さとの関係である ($\gamma = 0.066, n.s., \gamma = -0.082, n.s.$)。対人支援の項目が困っているメンバーを助けるといった項目であることを考えると、チームスポーツの経験が集団一体感やコミットメントを促してその集団に属するメンバーを助けるという影響関係の流れではなく、(当該チームのかかわりは関係なく)相手と形成する個人的な人間関係次第で、支援を行ったり行わなかったりする傾向が強いのかもかもしれない。誠実さについても、チームスポーツの経験が不平を言わない習慣を形作る、あるいは不平を言わない傾向の強いものがチームスポーツを経験しやすいということよりも、より個人的なパーソナリティのような変数のほうが、誠実さとの関係が強いのかもかもしれない。

表2 重回帰分析の結果

被説明変数	説明変数	非標準化係数		標準化係数	<i>t</i>	有意確率	Adj. <i>r</i> ²	<i>F</i>
		B	標準誤差	Beta				
犠牲行動	(定数)	2.719	0.45		6.036	<0.001	0.293	17.664**
	性別	0.307	0.115	0.184	2.672	0.008		
	集団統合感	-0.084	0.107	-0.094	-0.783	0.435		
	集団コミットメント	0.505	0.105	0.580	4.807	<0.001		
	チームスポーツ経験	0.266	0.116	0.159	2.296	0.023		
効果的コミュニケーション	(定数)	3.901	0.511		7.632	<0.001	0.109	5.923**
	性別	-0.034	0.13	-0.020	-0.257	0.797		
	集団統合感	-0.047	0.121	-0.052	-0.388	0.699		
	集団コミットメント	0.311	0.119	0.354	2.612	0.010		
	チームスポーツ経験	0.231	0.131	0.137	1.756	0.081		
対人支援	(定数)	2.428	0.489		4.966	<0.001	0.256	14.863**
	性別	0.400	0.125	0.226	3.207	0.002		
	集団統合感	0.084	0.116	0.089	0.720	0.473		
	集団コミットメント	0.373	0.114	0.405	3.267	0.001		
	チームスポーツ経験	0.098	0.126	0.055	0.778	0.438		
誠実さ	(定数)	2.560	0.748		3.420	0.001	0.086	4.788**
	性別	0.109	0.191	0.044	0.570	0.570		
	集団統合感	0.056	0.178	0.043	0.317	0.752		
	集団コミットメント	0.358	0.175	0.282	2.053	0.042		
	チームスポーツ経験	-0.307	0.192	-0.126	-1.595	0.113		
清掃行動	(定数)	3.027	0.465		6.511	<0.001	0.236	13.366**
	性別	0.136	0.119	0.082	1.141	0.256		
	集団統合感	0.229	0.110	0.258	2.075	0.040		
	集団コミットメント	0.179	0.109	0.206	1.646	0.102		
	チームスポーツ経験	0.315	0.120	0.190	2.614	0.010		

n = 161, **: p < 0.01

表2は、5つのOCBS次元に対して性別、集団統合感、集団コミットメント、チームスポーツ経験の4つの変数を説明変数とした重回帰分析の結果である。この表から分かるように、OCBSの次元ごとに結果は必ずしも同じでないことが分かる。まず性別の影響は、犠牲行動と対人支援で有意であり（犠牲行動： $\beta = 0.184$, $p < 0.01$, 対人支援： $\beta = 0.226$, $p < 0.01$ ）、いずれも男性より女性のほうがこの種の行動が多い。逆に、効果的コミュニケーション、誠実さ、清掃行動は性差が出ない行動である。次に、スポーツ一体感の2次元については、いずれかの項目がOCBSに対して有意な正の影響を与えてお

り、全体的には一体感を強く持つほど、OCBSが高いという結果が出ている。しかし、2次元の影響は必ずしも同一ではない。清掃行動以外の4つのOCBS次元では、集団統合感には有意な影響を与えず(犠牲行動： $\beta = -0.094$, n.s., 効果的コミュニケーション： $\beta = -0.052$, n.s., 対人支援： $\beta = 0.089$, n.s., 誠実さ： $\beta = 0.043$, n.s.)、集団コミットメントのみ有意な正の影響を与えている(犠牲行動： $\beta = 0.580$, $p < 0.01$, 効果的コミュニケーション： $\beta = 0.354$, $p = 0.01$, 対人支援： $\beta = 0.405$, $p < 0.01$, 誠実さ： $\beta = 0.282$, $p < 0.05$)。すなわち、これらのOCBSに対してH2は支持され、H1は支持されなかった。これに対して、清掃行動に対しては、集団統合感のみが有意な影響を与え($\beta = 0.258$, $p < 0.05$)、集団コミットメントの影響は有意ではない($\beta = 0.206$, n.s.)。すなわち、清掃行動に関してはH1が支持され、H2は支持されなかった。清掃行動以外のOCBSの場合、チームが集団として一致しているという意識よりも、そのチームを好きだという意識のほうがOCBSに影響することが分かる。これに対して、清掃行動は、チームの雰囲気をよくすることや、チームの評判を高めるという効果があるが、清掃行動は、チームメンバーと同じ目的で同じ行動をするという、まさに統合感がある場合に行うものであり、そのチームが好きかどうかということは余り関係しない。

チームスポーツ経験はOCBSの次元によって有意な影響を与えるものと与えないものが存在する。犠牲行動、清掃行動はチームスポーツの経験が有意に正の影響を与えており(犠牲行動： $\beta = 0.159$, $p < 0.05$, 清掃行動： $\beta = 0.190$, $p = 0.01$)、個人スポーツの経験よりもチームスポーツの経験のほうがこのようなOCBSに正の影響を与えることが分かった。効果的コミュニケーションも、有意水準は0.081と必ずしも十分な値ではないが、同様の傾向があると考えられる。これらのOCBSについては、H3は支持されたと考えられる。

8. ディスカッションおよび結論

以上の分析結果から、全般的には、OCBSは一体感やチームスポーツ経験から予想通りに正の影響を受けることが明らかになった。しかし、個々のOCBS次元についての影響は必ずしも同一ではなく、そこにはOCBS次元ごとの特徴が反映されているということが出来る。

OCBSの5次元のうち、清掃行動以外の4次元は、集団統合感よりも集団コミットメントが有意に影響していた。実際のところ、これらの4次元の行動の背景にはチーム内のメンバー同士に何らかの差や違いが生じていることには注意すべきである。たとえば、犠牲行動には正選手として選ばれる選手と選ばれずに自己犠牲をする者がいるし、対人支援は支援を必要とする者と支援をする行為者がいる。効果的コミュニケーションや誠実さではチーム内に不満の原因になる者と不満を持つ者がいる。このような状況ではチームは潜在的には統合性が欠如していると言えなくもなく、このようなOCBSに対しては統合を重視することが影響しにくいことは想像しやすい。

これに対して清掃行動だけは集団コミットメントではなく集団統合感が影響している。清掃行動の場合、前述のようなメンバー間の差は存在しておらず、それはたとえばチームで同じユニフォームを着ることと同様に、清掃という同じ行動をチーム全員で行うことによって帰属意識や責任感を高める行動となっている。したがって、このような全員一致の行動には集団統合感が影響することも当然と言えるかもしれない。

次にチームスポーツの経験の影響についてであるが、OCBSの次元のうち、犠牲行動や清掃行動は、実際にチームに所属しないと味わうことがない行動であり、その経験が反映しやすい行動である。対人支援は、前述したように従来のOCB次元のaltruismに近く、どちらかというチームスポーツの経験とは関係が薄い一般的な貢献行動である。また、誠実さも、OCB次元のsportsmanshipと同類のものであり、これもまたチームでの経験とは関係が希薄であることが考えられる。効果的コミュニケーションの結果はやや曖昧であるが、やはりチームの経験よりは、「正しいと思ったことは積極的に主張すべき」という価値観が影響しやすいものであると言える。このように考えると、チームスポーツの経験が有意に影響したOCBSの次元は、チームスポーツの経験がなければその重要性に気づきにくい行動であり、逆にチームスポーツの経験が有意に影響しなかったOCBSの次元は、日常生活や他の組織に所属する経験の中でもその重要性を認識しやすい行動であったと言えるであろう。

本研究は、OCBSに対して集団一体感のような心理的要因とチームスポーツ経験のような行動的要因の影響を解明したという点では有益であると考えられるが、研究としては不十分な点も多く、その点ではパイロットスタディにとどまるものである。たとえば、首都圏の私立大学1校の学生のみからデータを集めていることで、サンプルの偏りが存在する可能性がある点はまず問題点として指摘されるべきであろう。さらに、たとえばチームスポーツの経験についても、今回はチームスポーツに従事したかどうかだけを尋ねており、それがいつの時点の経験なのか(はるか昔なのか、それとも今も従事しているのか)、またどの程度の期間、どの程度の熱心さで従事したのかは尋ねていない。単純に考えても、チームスポーツの経験は、それが最近かつ長期間であり、さらには熱心であるほど、OCBSに強い影響を及ぼすことが予想される。このような点まで考慮して、チームスポーツの経験の影響を明らかにすることは今後の課題とすべきであろう。

日本のほとんどの大学においてはその専攻にかかわらず何らかのスポーツ科目が配置されている。これらのスポーツ科目の基本的な目的は、スポーツを通じて学生自らが心身の健康を維持し、さらにその健康の重要性を認識することである。しかし、学生をチームスポーツに従事させることによって、他者を助け、他者に助けられながら他者との協調的な人間関係を築き上げることの重要性を学ぶということも極めて重要な目的となる。本研究を通じて、スポーツ科目が果たす社会的機能について注目が集められることを希望している。

※本研究は科学研究費補助金(19H01520)の交付を受けた研究の一環である。

参考文献

- Aoyagi, M. W., Cox., R. H., & McGuire, R. T. (2008). Organizational citizenship behavior in sport: Relationships with leadership, team cohesion, and athlete satisfaction. *Journal of Applied Sport Psychology*, 20 (1), 25-41.
- Bateman, T. S. & Organ, D. W. (1983). Job satisfaction and the good soldier: The relationship between affect and employee "citizenship". *Academy of Management Journal*, 26 (4), 587-595.
- Carron, A.V., Colman, M.M., Wheeler, J., & Stevens, D. (2002). Cohesion and performance in sport: A meta analysis. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 24 (2), 168-188.
- 嘉瀬貴祥・坂内くらら・大石和男(2016)「日本人成人のライフスキルを構成する行動および思考：計量テキスト分析による探索的検討」『社会心理学研究』第32巻第1号, p.60-67.
- 河津慶太・杉山佳生・中須賀巧(2012)「スポーツチームにおける組織市民行動, チームメンタルモデルとパフォーマンスの関係の検討—大学生球技スポーツ経験者を対象として—」『スポーツパフォーマンス研究』第4巻, p.117-134.
- 松木祐馬・下司忠大(2020)「全般的集団同一視傾向尺度(GGIT)の作成と信頼性・妥当性の検証」『パーソナリティ研究』第29巻第2号, p.47-49.
- 宮澤薫(2015)「ブランド・コミュニティに見る消費者の自発的参加行動」上田泰編著『従業員と顧客の自発的貢献行動』多賀出版.
- 持田和明・高見和至・島本好平(2016)「スポーツ組織市民行動尺度の作成」『コーチング学研究』第30巻第1号, p.15-27.
- 持田和明・高見和至・島本好平(2021)「集団凝集性及び集団効力感に影響を与える個人要因：大学サッカー部員のライフスキルと組織市民行動に着目した因果モデルによる検討」『スポーツ産業学研究』第31巻第1号, p.1-15.
- Organ, D. W. (1988). *Organizational Citizenship Behavior: The Good Soldier Syndrome*. Lexington, MA: Lexington Books.
- Organ, D. W. & Konovsky, M. (1989). Cognitive versus affective determinants of organizational citizenship behavior. *Journal of Applied Psychology*, 74 (1), 157-164.
- Organ, D., Podsakoff, P., & MacKenzie, S. (2006) *Organizational Citizenship Behavior: Its Nature, Antecedents, and Consequences*. Sage.
- Smith, C. A., Organ, D. W., & Near, J. P. (1983). Organizational citizenship behavior: Its nature and antecedents. *Journal of Applied Psychology*, 68 (4), 653-663.
- Ueda, Y. & Yoshimura, A. (2011). University citizenship behavior in class: The effect

of professor's lecture justice on students' diligence, *Review of Asian and Pacific Studies*, 36, 87-99.

Yamada, K., Arai, H., Nakazawa, T., Kawata, Y., Kamimura, A., and Horosawa, M. (2013). A study of the unity of sports teams: development of a scale and examination of related factors. *Journal of Physical Education and Sport*, 13(4), 489-497.

田原 麗衣 経営学部 専任講師
上田 泰 経営学部 教授
2023年1月11日